

いひ、摩訶羅翻して无智といふ義也ともいへり、

〔書言字考節用集九言辭〕阿方。鈍者俗罵愚。阿房或用此字。

〔俚言集覽阿〕あほ。癡人を云、又アホウとも云、續無名抄、世話字盡、阿頰諺草、阿房、愚了阿村田按諺草

阿房の字なれば、安波于の假字なり、アホとのみも云、又アンボンタンなどの語もあれば、房字を

充たるは、例の推當なり、大坂にてアホを十、島と云、平假字のあほの字、十のしまなれば也、交友抄、

樂交、金柱友、勿交、鷄蓬友、鷄字は鷄字なるべし、斥鷄曲蓬と云事なれども、本俗語のアホウに因て、

鷄蓬の音を充しならん、若然らば此俗語古し、交友抄は康應元年の物なり、

〔書言字考節用集四人倫〕倭侗者。鈍無知也。倭ウツケ。侗モキ。空虛者後漢第五倫傳。空虛俗字。

〔倭訓栞字編四〕うつけ。日本紀に虚字、無實字などをよめり、虚氣の義なるべし、俗に白痴を稱するは、後漢書に空虚之質といへる意也とて、俗に空字も造りよめり、

〔醒睡笑二〕空。

腑のぬけたる仁にゑびをふるまいけるが、赤を見てこれはうまれつきか、又朱にてぬりたる物

かと問ふ、生得はいろがあをけれど、かまにていりてあかふなるといふを、合點しむけり、ある侍

の馬にのりたる先へ、二間まなか柄の朱鍵二十本計もちたる中間どものはしるを見、手を打つ

て、さても世はひろし、きとくなる事やと感する、なにをそなたは感するやと問ひたれば、其の事

よ、いまの鍵の柄の色は、火をたいてむいたものじやが、あれほどながいなべがよふあつた事や

と、

〔物類稱呼五言語〕おろかにあさましきを、京大坂にてあんだ、又あんだら、共云、伊勢にてあんが、又

せいふと云、越中にてだらけと云、因幡にてだらすと云、信濃にてだぼうと云、俗に馬鹿と云は、史

記、秦趙高故事にもとづけり、